

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名

大坪玲子

提出者大坪玲子氏の博士論文「嗜好品カートと現代イエメンの経済・社会」は、2003年から2009年にまたがる長期間にわたるフィールドワークをとおして、わが国においてその実情を紹介されることが極めて少ないイエメンの経済・社会を詳細に論じた労作である。

論文は、序論、10章からなる本論、および結論によって構成されている。序論において大坪氏は本論文の目的として、第一に「イエメン社会で大きな役割を果たしている嗜好品カート（ニシギギ科の灌木 *Catha edulis* Forskal の葉で、アンフェタミンに似た成分を含むため、新鮮な葉には興奮作用がある）の生産・流通・消費の実態を明らかにし、カートをとおしてイエメン社会を描くこと」、そして第二に「これまでの学問的議論の中で提示されてきたイスラーム・商業・社会ネットワークの関係を見直し、新たな姿を提示すること」の2点を掲げる。

第1章から第3章までは、理論的検討ならびにカートを取り巻く社会・経済的バックグラウンド情報の提供をめざした部分である。まず第1章「イスラーム経済に関する考察」では、イスラームにおいて経済的な行為が宗教と表裏一体で語られてしまう傾向に疑問を呈し、ヨーロッパなどの他地域やキリスト教などの他宗教について検討することをとおして、経済と宗教の関係について考察する。

第2章「歴史、宗教、政治」は、イエメンの歴史的・宗教的・政治的背景を示す部分である。対外貿易や外部勢力の介入によってイエメンを含む南アラビア地域が外向性を持っていたと同時に、同地を支配した宗教勢力が内向的な性格を持っていたことが明らかにされる。そして、第3章「開発と経済」においては、1960年以降のイエメンの政治経済状況が概観されている。湾岸諸国などへの出稼ぎ、同地域からの援助、石油の発見と開発など、イエメンにおける政治経済史の主要なトピックが扱われると同時に、カートに関しての検討にとって欠かせない農業の状況についても基本的な状況を提示する。

第4章から第10章までが、本論文における理論の中心をなす嗜好品カートに関する部分である。まず第4章「世界の中のカート：薬物か嗜好品か」において、カートの位置づけについて論じた後、第5章「イエメンのカートの歴史と特徴」においてカートの歴史、カートの効果と影響、イエメン産カートの特徴について論じられている。

第6章と第7章は研究が比較的蓄積されたカートの消費について扱う部分である。まず、第6章「カートをめぐるマナー」において、カートと儀礼に関する考察をとおして、カー

トの文化的側面が明らかにされ、第7章「消費の変化」においては、アンケートをもとに多様化するカート消費の実態が明らかにされている。

第8章「カートと他の農作物」は、生産現場の実地見聞の記録から始まり、カートの生産方法、インタビューに基づいたカート生産者の動向、他の農産物との関係が記述され、イエメンの農業におけるカート生産の位置づけが明らかにされている。第9章「流通経路とその効率化」および第10章「商人、生産者、購入者の関係」は、カートの流通に関する部分である。第9章ではカートの流通経路とその特徴が明らかにされ、第10章ではカート商人一人一人に注目し、カート市場の特徴や、商人・生産者・消費者のカート流通にまつわる知識のあり方が分析されている。そして最後に結論において、ゆるやかな関係としてのネットワークをキーワードに全体が総括され、議論がまとめあげられている。

本論文は、調査が非常に困難な地域における長期間にわたる綿密なフィールドワークによって、イエメン地域における研究の空白を埋め、カートを通してイエメンの変化を描いた質の高い論文であると評価できる。審査委員一致して大坪氏の努力を高く評価するものである。また、イスラームと経済・商業の親和性についての議論が盛んであった学会の趨勢の中で、イスラーム圏における経済活動をイスラームの枠内に閉じ込めず、経済人類学の観点から緻密な議論を展開したことも高く評価することができる。大坪氏が“浮気性”と表現する商人たちの柔軟な取引相手の柔軟な選択方法の解析を通して導き出したネットワークの「柔軟性」と「可塑性」という特徴に関する議論は、バザール経済の実態などを視野に含めることによって、イスラーム圏における市場の制度学を構築する可能性をほらむものであり、研究の発展性の面でも審査員から高い評価を得た。

しかしながら、本論文にも問題点がないわけではない。論文題目にもある“嗜好品”という概念の定義が不十分であるという指摘がなされたほか、本論文の大きなテーマである“イスラーム経済論”とカートに関する議論の関係がまだ十分に整理されていないくらいがあることも、複数の審査員が共通して指摘した点である。

しかしながら、これらの問題点も本論文の価値を大きく損ねるものではなく、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。